

近未来 Genesis 第2号



あかさびしらす
「赤錆不知一号」(本育52号)

開拓使が米国から小麦種子を輸入し試作したところ、北海道の風土に適した作物であることがわかり、栽培面積が増加してゆき大正元年には2万2千haとなった。しかし、栽培面積の増加にともない赤錆病が全道にまん延し、ついに1万haを割ってしまった。大正15年には第一次の小麦育成の指定試験が設置され、まもなく登場したのが「赤錆不知一号」であった。しかし、指定試験後2年にして世に出たこの品種のかげに、日本製粉株式会社の井上金弥氏の努力による同社からの毎年1,000円づつ10年間(大正6年から)の研究費によって育成が可能であったことを忘れることはできない。

昭和2年に育成された「赤錆不知一号」は、強稈ではないが、錆病に強く、良質多収であり、冬枯れにも非常に強かったので作付比率は一挙に増加し、第二次世界大戦後「北栄」が生まれるまで、北海道の秋まき小麦の王座を占めていた。

この品種は、のちの東北及び北陸地方で活躍した品種の母本になったこと、また、新たな菌株の出現により錆病抵抗性も当初ほどの神通力を現在保持していないことを書き添えておきたい。ちなみに、平成2年の北海道における小麦作付面積は約12万ha、生産量は全国の50%を越えている。また、大正6年における研究費1,000円を現在の価値に換算すると、試算対象物によりかなり異なるが、「米」、「酒」及び「そば」の平均値から、およそ500万円と推定される。



発行

北海道立植物遺伝資源センター

〒073 北海道滝川市南滝の川363-2 TEL(0125)23-3195

FAX(0125)24-3877

1992. 3. 31

メキシコのトウモロコシ遺伝資源

農林水産省北海道農業試験場総合研究第2チーム長

戸澤英男

とうもろこし育種に携わっていた昭和56年の夏、アメリカ西海岸とメキシコへの3週間の旅をした。目的は採種事情調査という名目のトウモロコシ遺伝資源の収集である。

アメリカでは、いくつかの育種圃等を見たが、自殖系統の雌穂の立派さには驚かされた。同じ自殖系統でも日本の2倍以上の大きさと記憶している。スイートコーン品種「ジュビリー」の親自殖系統も同様で(写真1)、この生粒を1粒でも持ち帰れないかとウロウロしてみたが、監視されて何もできなかったのが今でも悔しい思い出となっている。アメリカを早々に引き上



写真1.ジュビリー(上)とその両親



写真2. CIMMYTからの一部

げて、メキシコへ発った。

CIMMYTでは支場を含め各育種圃や種子貯蔵庫をみて回り、また点在する集落にも入った。そしていくつかのトウモロコシ、テオシントやトリブサクムの種子を手に入れた(写真2)。メキシコ市近郊のチャピング農科大学では、日系3世のDr. KATOHに彼が収集した多年生テオシントやこれとトウモロコシの交雑研究圃を案内していただいた(写真3)。私はかねてから日本のトウモロコシ育種を飛躍的なものとするには、こうしたテオシントやトリブサクムとの交雑が心要と考えていたので、これらの種子譲渡を依頼し快諾を得た。ユカターンでは9品種しか収集でき

なかった。

旅は短期間であったが、トリブサクムや多年生テオシントの導入はわが国で初めてのことであった。帰国後年明けの2月にトウモロコシを含むこれらの種子を直ちに温室(十勝農協連)に播き、その後数回の移植を繰り返して圃場に定植、十勝農試がこれまで育種母材としてきたトウモロコシとの交配種子を採ることができた。これらの後代がいつかわが国の品種育成に役立てばと、今でも願っている。

(元北海道立十勝農業試験場とうもろこし科)



写真3. Dr. KATOHと多年生テオシント



秋田県遺伝資源開発利用センターの概要

秋田県生物資源総合開発利用センター（愛称アキタバイオミックエリア）は、近年における農業の国際化、消費者ニーズの多様化などを背景に新技術の開発が進展するなど農業を取り巻く情勢が刻々と変化するなかで、最新技術の普及伝達及び先端技術の実用化研究を効率的に推進するため、平成3年9月に創立された。遺伝資源開発利用センターは、このエリア内に設置されている。

施設の内容

構造：鉄筋コンクリート平屋建 763.0㎡

施設：事務室、会議室、図書室、培養基準備室、無菌操作室、培養室、馴化育苗室、種苗管理調査室、特性調査実験室、生理生態実験室、種子貯蔵庫6.6㎡、一般貯蔵庫6.6㎡、ガラス温室300㎡、網室300㎡、資材庫212㎡、試験圃場12,670㎡（水田1,670㎡、畑11,000㎡）

事業の内容

農業生産に役立つ形質を持った生物資源の開発と利用を目標として、他の試験研究機関との連携のもとに、実用研究ととその利用に関する知識や技術の指導普及を行うとともに、ウイルスフリー種苗や新品種などの育成及び県内を中心とした有用遺伝資源の収集と保存を行う。

遺伝資源収集調査に関しては、平成4年度から本格的に行う予定である。主に県内の野菜、果樹、豆類、山菜、野草など自生種、在来種が対象である。

編集後記

北海道立植物遺伝資源センターでは「事業実施計画書」「年報」「植物遺伝資源開発研究成績書」「広報紙」などの刊行物を定期的に、また、その他の成績書を随時に発行しています。昨年度は、「植物遺伝資源保存目録」と「植物遺伝資源探索・導入成績書」を刊行しました。本年度は「植物遺伝資源保存目録（第2版）」と「植物遺伝資源特性調査報告書（案）」を出版する予定です。

これらは研究員の研究活動を核（コア）とし、それを支援する管理部門との協同作業による成果品です。また、そのデータは研究員の感性により導き出された自然からのメッセージです。これによって新たな研究活動が誘発され、その結果生じた知的連鎖反応は試験研究に永続性をもたらします。

北海道立植物遺伝資源センター広報紙「ジェネシス」は、第2号においてそのスタイルを確立することができました。それは、第一に当センターの研究業務の紹介、そして第二に植物遺伝資源を取り扱う研究機関とのネットワーク化、つまり遺伝資源情報の共有化です。

今後とも、植物遺伝資源という人類の財産を対象とする試験研究に「生命」を与えるために、研究感性を触発する情報誌でありたいと思います。

（編集子）